

●第28回 流域シンポジウム

2022年度の流域シンポジウムを、11月13日(日)に山梨県上野原市内で開催予定です。新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえながら、対面で開催できるように準備を進めています。

今回はメインテーマを「森を動かす Part II」、サブテーマを「木育～木のぬくもりに触れてみよう～」として、午前と午後の2部構成で行います。

日時：2022年11月13日(日) 10時～16時

会場：上野原市八重山地区(午前)、上野原市立もみじホール(午後)

内容：森林体験、シンポジウム

方法：対面、オンライン

午前の部「森林体験」

北都留森林組合の方を講師にお迎えして、森林についてのお話と、間伐体験を予定しています。

森の中で、木の役割や森の役割について話を聞いたあと、森を育てるために行う間伐を実際に木を切って体験する予定です。

午後の部「シンポジウム」

森林環境譲与税について、東京大学大学院の蔵治光一郎教授による講演と、税を活用して実際に事業を行っている自治体からの事例発表を予定しています。

森林の機能を維持していくため、間伐をはじめとした森林の整備に必要な財源の確保を目的に2019年度に創設された森林環境譲与税について、税の仕組みや、税を活用した取組事例を学ぶ予定です。

※ お子様の保育

お子様連れの参加者を対象に、午後のシンポジウム開催中にお子様をお預かりする保育スペースを設けます。(保育士が常駐します)

詳しいスケジュールや申し込み方法等については、協議会のホームページに随時掲載していきます。ぜひ、ご参加ください。

桂川・相模川流域協議会ホームページ

<http://katurasagami.net/>



入会のご案内

協議会では、いっしょに活動していただける方の入会をおまちしています。

桂川・相模川の水環境の保全や再生のため、グリーンキャンペーンや、上流・下流との交流事業など、さまざまな活動を行っています。

お問い合わせは事務局まで。

あなたのその力が
豊かな水環境を創ります

原稿
大募集

本誌に掲載する原稿を募集します。

採用された方には粗品を贈呈いたします。

みなさんからのご応募をお待ちしています。

募集要項

・テーマ「あなたの好きな流域の風景」

・A4・1ページ(800字程度と写真数枚)

※応募原稿は自作未発表のものに限ります

応募方法

お名前、ご住所、お電話番号を明記の上、事務局あて郵送又はメール(ft-rinmuk@pref.yamanashi.lg.jp)でお送りください。

表紙写真/撮影場所：相模原市緑区青野原の寺入沢林道の沢 写真提供：神奈川県環境農政局緑政部水源環境保全課

本紙に対するご意見・ご感想を下記事務局までお寄せ下さい。

あじえんだ 113 No.49(2022.10発行)

発行 桂川・相模川流域協議会

編集 あじえんだ 113 編集委員会

桂川・相模川流域協議会ホームページアドレス <http://katurasagami.net/>

事務局 山梨県林政部富士・東部林務環境事務所 〒402-0054 都留市田原2丁目13-43 TEL.0554-45-7811 FAX.0554-45-7807
神奈川県環境農政局緑政部水源環境保全課 〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL.045-210-4352 FAX.045-210-8855



■やまなし森の印刷紙
この印刷紙には、FSC®
森林管理認証を取得した
山梨県有林からの木材が
使用されています。



ユニバーサルデザイン
(UD)の考えに基づいた
見やすいデザインの文字
を採用しています。

あじえんだ

2022.10
第49号

- 上下流交流事業(森林体験)
- 環境学習支援(湘南学園)
- 森づくり推進事業(森林環境譲与税)
- 連載(川の記憶(25)ほか)
- 総会報告

上野原市八重山での森林体験

実施日：2022年7月17日（日）

場所：上野原市 八重山

参加者：52名（神奈川県42名 山梨県10名）

協力：北都留森林組合

報告者●日向 治子／市民会員

新型コロナウイルスの感染拡大で実施が見送られていた上下流交流事業が、3年ぶりに上野原市・八重山で開催されました。

八重山は、桂川・相模川の上流の山。清らかな水を育む森林を観察し、水を作り出す山々がどのように守られているのか。上流部の森林で林業体験をすることで、山・川・水を考える。

天候を気にしながらの開催でしたがバッチリ晴れて、山が水を蓄える様子も感じられ、素晴らしい時間を過ごせました。



八重山展望台へのハイキング

集合場所の上野原中学校・校門前から登山道に入り、枯沢沿いの植林を登って行きます。次第に登りがきつくなり、途中、ベンチの置かれた高台で休憩。登山道の両側にはヤマユリやホタルブクロが見られ、満開のネムノキの花が、ほっとするひとときを与えてくれました。そこから展望台まではやや急な登りとなり、最後は階段を上がり、山頂付近の木造の展望台に到着。張り出したテラスからは、陣馬山、石老山や道志、丹沢の山々が見渡せました。

子ども達は図鑑を片手に、付近の植物や昆虫の探索に夢中。なんとミヤマクワガタとも出会いました。



パノラマ台からの山々

標高531mの八重山は、上野原市街の里山です。1929年、上野原で生まれ育った水越八重さんが、上野原のまちと上野原小学校に、お世話になった恩返しにと寄付し、それにちなんで命名されました。山名が人名に由来する珍しい山です。周辺一帯は「見る・聞く・嗅ぐ・触る・味わう」という「八重山 五感の森」として整備され、見事な展望が開けているのが特徴です。
引用元：上野原市ホームページ
(発見うえのはら - 八重山 (hakken-uenohara.jp))

スケジュール

| | |
|-------|--------------|
| 9:15 | 現地集合 |
| 9:30 | 八重山展望台へハイキング |
| 10:00 | 山の話・流域の話 |
| 11:30 | 昼食 |
| 12:30 | 伐採について |
| 12:45 | 伐採体験 |
| 14:00 | 感想シェアリング |
| 14:30 | 現地出発（帰路） |



子ども達の図鑑を見る様子



のこぎり装着



木を切る

伐採体験

午後は、北都留森林組合の方々の指導で伐採体験。こども達1人1人にヘルメットとノコギリが渡され、緊張の面持ちで装備。伐採の手順の説明を受けて2班に分かれて伐採作業を開始しました。切る木の前に立って、受け口、追い口と順にこども達全員で切り進めていきました。「はい、倒しますよ〜！」との指示で、木に掛けられたロープをみんなで力を合わせて引く。バサバサという音と共に木が傾き、ドスンという響きと一緒に木が倒れ、一同は大歓声。



伐採の説明



倒木

こどもたちの感想

- ・楽しかった。展望台まではきつかったけど、登り切った時は、すごく気持ちよかったです。
- ・ミヤマクワガタを見つけた。そしてカエルが山にいたのでビックリした。
- ・みんなで力を合わせれば木を切ることが出来るって解って、凄いなと思いました。



学校法人 湘南学園中学校 (藤沢市) 総合学習校外フィールドワークを支援しました

報告者 ● 中門 吉松 / 市民会員

桂川・相模川流域協議会HPを通じて依頼のあった2件の学習支援を報告します。

1. 中学2年C組 “川を守っている人から学ぶ”
7月1日(金)9時にJR相模線宮山駅で生徒34名、先生2名を迎えて、相模川左岸神川橋下河原まで歩いて移動して校外学習フィールドワークの支援を行った。



相模川の石ころビンゴ



相模川生まれの鮎の塩焼きを食べました



ゴミを拾い、河原での体験を楽しみました。



【寒川町民センターでの講義による学習】

- ・川の生物と河川環境 (内水面試験場 勝呂尚之さん)
- ・生活は海の入り口 (日向治子さん)
- ・神川橋下河原の植物 (河合靖さん)



内水面試験場勝呂さん「川の生物と河川環境」のお話



生徒さんからお礼のあいさつがありました

[1のまとめ]

猛暑日のために移動途中で体調を崩す生徒も出たが、学習会終了時は全員元気に帰路についたので安心した。成果発表では質の高い、学びの濃い内容だったとの報告も頂いた。

2. 中学3年“環境改善のための活動を知ろう!”

7月6日(水)9時にJR相模線寒川駅でフィールドワーク参加の7名の学生を迎えて、支援メンバーも少人数で対話しやすい環境で実施した。

“相模川での活動を紹介して体験で学ぶ” (1) 講義による学習 (2) 体験学習

| | 場所 | 内容 |
|-----|-----------------|--|
| (1) | 寒川町民センター | ⑨ 持続可能な相模川へ ⑩ カワラノギク保全活動 *1 生活は海の入り口 *2 神川橋下河原の植物 ⑪ 流域治水 |
| (2) | 相模川左岸 神川橋下河原 | ⑫ 河原のゴミ拾い ⑬ 河原の生き物調べ 昼食を取りながら懇談 |

【寒川町民センターでの講義による学習】

- ・SDGs 持続可能な世界へ 相模川の果たす役割
- ・カワラノギク保全活動紹介 (榎本順次郎さん)
*1、*2は中学2年生の⑦⑧と同様の講義
- ・流域治水プロジェクト (京浜河川事務所 澤村さん)



【相模川左岸神川橋下河原での体験学習】

相模川渡し場跡を説明



川に触れてみよう



短い時間でしたが楽しく学びました



[2のまとめ]

グループ7名で明るく楽しそうに学んでくれて良かったです。体験学習の時間が短くて残念でしたが、学んだことを他の学生と共有してこれからの環境活動に生かしていくことを期待します。

| “相模川河原でフィールドワーク” 午前：体験学習、午後：講義による学習 | | |
|--|----------|--|
| 時間 | 場所 | 内容 |
| 午前 | 相模川左岸 | ① 河原のゴミ拾い ② 川の生き物調査 ③ 相模川の石ころビンゴ |
| 昼食 | 神川橋下河原 | ④ 鮎の塩焼き ⑤ スイカ割り |
| 午後 | 寒川町民センター | ⑥ 川の生物と河川環境 ⑦ 生活は海の入り口 ⑧ 神川橋下河原の植物 |

【相模川左岸神川橋下河原での体験学習】

先ず最初に河原のゴミ拾い



川の生き物調査



『古事記』の「焼津」は相模にあり

静岡県中部に位置する「焼津市」だが、朝廷の最古の史書『古事記』では「焼津」の地名は「相模国」に由来すると伝えられている。地名の由来について記す。

相模川の源流は相模郷

本来、相模川の源流は、現在の道志川であったにちがいない。道志川が合流する地点より上流の地域では、相模川は江戸時代からずっと、「桂川」と呼ばれてきた。流域の村々も、「桂の里」を称していた。

山梨県南都留郡道志村の谷が、「相模国」に属したことは、朝廷の正史『六国史』の一つ『日本後紀』延暦十六年(七九七)三月二日の記事や、その地勢からしても疑いない。

九世紀の地方行政組織を反映しているといわれる、承平年間(九三一―)の成立とする『倭名類聚抄』では、甲斐国都留郡の郷名の最初に「相模」が見えているが、それは、その直前に起こった富士山の噴火による被害を復興するため、直接の災害の少ない相模郷を都留郡に編入して、その再生の拠点にしたからにちが

谷から中川の谷に続く山地一帯が「相模ノ郷」であったとすれば、小天井から蛭ヶ岳にかけての山地が、本来のサガム・サガミの地であったにちがいない。

大きな河川では、しばしば上流部分の呼称が、そのまま河口部分でも生きていることがある。『新編武蔵風土記稿』を見ると、多摩川は、甲斐国都留郡丹波村に発し、「正保年中改定図」などでは、河口に「タバ川」と記す。「相模川」も、「相模郷」から流れ出した大川で、海までその名で呼び、それが国名にもなったのであろう。

『古事記』の「焼津」は中川に

「相模」の国名は隣国の甲斐に発していた。静岡県焼津市と同じ「焼津」という地名が、国土地理院の「地形図」(二万五千分の一)「中川」には、山北町の中川の谷の下流域の右岸に記されている。江戸幕府の地誌『新編相模国風土記稿』(一八六七年成立)の足柄上郡中川村の条に、小名「ヤケズ」として登場する、古い集落の名残である。

この「焼津」という地名に私がこだわるのは、朝廷の最古の史書『古事記』(七二二年)の景行天皇の段に、御子のヤマトタケルが東国の「相模国」で、「国造」(支配者)の火攻めに遇っ

いない。

この「相模郷」がどこかという問題を、道志村の組織から明快に分析したのは、文化十一年(二八一四)成立の松平定能編『甲斐国志』巻五十三「相模郷」である。

当時の道志村での伝えでは、相模分の中川・箒沢などの山村の「山相模」は道志と一つの村で、富士山の小天井から神野川の蛭ヶ岳大コヒジカメワまでであった。総称は「相模ノ郷」で、中川・箒沢・道志は、郷の中の村名である。道志の谷・中川の谷を含めて、富士東麓から蛭ヶ岳までが、相模郷になる。

律令制以前、地域の土豪は「國造」と呼ばれていたといい、九世紀の成立という上代の史書『先代旧事本紀』巻十「国造本紀」には、全国国造の具体的な記述がある。相模国に相当する地域には、「相模国造」と「師長国造」があったとする。

たとき、賊を向かい火で亡したのに由来する地名であると、伝えているからである。

現代では、なぜか『古事記』の増補改訂版に相当する『日本書紀』(七二〇年成立)が、「駿河」で賊を焼き滅ぼしたのが「焼津」であるとする伝えが有力である。朝廷の法典である『延喜式』(九二七年撰進)巻九「神名式」駿河国益津郡の「焼津神社」を、その遺跡と見ているのであろう。

しかし、『古事記』と『日本書紀』の「焼津」の物語の大きな違いは、単純に舞台が「相武」か「駿河」かである。朝廷の神事を支えに来た忌部氏の家伝を記す『古語拾遺』(一八〇七年成立)では、全般に『日本書紀』と共通する古伝を記しながら、「草薙剣」は、ヤマトタケルが東征のとき、相模国で、野火の難をさけるのに用いたとしている。

『古事記』に精通する古典学者の西宮一民は、「焼津」を相模とするのは、『古事記』で唯一の地理的矛盾であるとするが、それを裏返せば、「焼津」は相模国にちがいないという証言にもなる。この経緯を追いながら、私は『日本書紀』の編述者の中に、「焼津」を相模国から駿河国に移した人があったのではないかと推測する。

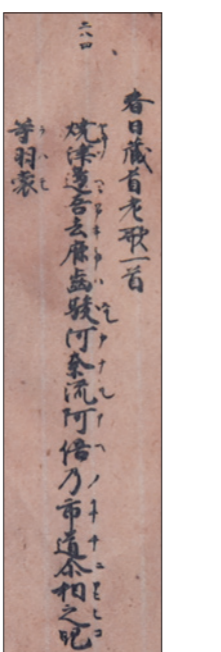
正倉院文書によると、天平七年(七三五)以前から、舎人親王の一族の所領が、相模国にあった。親王が『日本書紀』の編纂責任者であった



「蛭ヶ岳遠望」
中川の谷の反対側から津久井郡鳥屋村(現、相模原市緑区)の早戸川の大滝から、丹沢山地最高峰「蛭ヶ岳」を望む。『新編相模国風土記稿』(一八四一年成立)明治二十一年十月版より。

『古事記』には、景行天皇代に、御子のヤマトタケルが「相武国」で、「国造」の野火攻めに遇う物語がある。律令社会での「相模」という国名は、サガムからの転化であろう。道志の

とすると、相模国にヤマトタケルを討とうとする国造がいたとする物語を、駿河国に移した編修者が、いたかと思える。



「春日蔵首老の「焼津辺」の歌」
西本願寺本『万葉集』巻三(古典文庫・二、昭和二十二年二月刊)より



『古事記』の「焼津」の表記「津」の古体字

『古事記』の本文の「焼津」は、本居宣長の注釈書『古事記伝』など、一般に「焼遣」と書く。「津」の古体字「津」を、「遣」に読み誤ったもの。古体字は、漢籍の許慎の『説文解字』(一〇〇年自序)巻一上に見えている。

(お詫び)
前号までの連載の一部に連載番号の誤りがありましたので、今号の連載番号は「25」とします。なお、過去の連載番号については著者了解のうえで修正は行いません。著者及び読者の皆様にお詫びします。

【相模原市大島のヤツボ】

相模野台地の相模川に沿った急崖の露頭から湧き出る清水周りのを岩盤を削り、石垣で囲うなどして水を溜めて利用する場所を「ヤツボ」と呼んでいます。江戸時代から地域の人々の生活の場となっていました。現在では利用することが少なく枯渇したところもあるが、一部は史跡登録して地域で守り大切に保存されている。

相模原市史自然編より

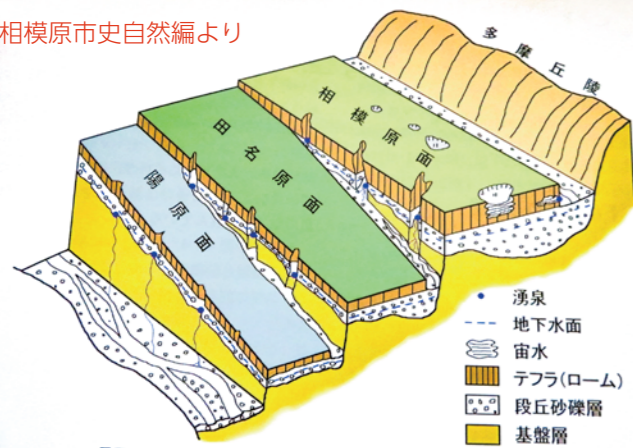


図7.1-3 相模原の段丘、地層、地下水、湧泉の関係を示すブロックダイアグラム
相模原市地形・地質調査会(1985)を改訂

1. ヤツボの語源

語源については、渾々と湧き出る泉が八ヶ所あるところから「八ッ壺」と言われるようになった。地形的な立場から「ヤ(谷)」+「壺(ツボ)」と考えられるなど諸説があるようです。

2. 相模原市の史跡(遺跡)としてのヤツボ

1) 大島中ノ郷のヤツボ (No50: H18年4月)

相模川左岸の相模川自然の村付近、基盤の相模湖層群と田名原礫層間から湧出しているという。つづら状に整備された急な階段を下ると、崖から湧き出る清水を石垣で覆った窪地が現れる。上部の祭壇部には、真ん中に八大龍王、左右に大日天、大月天と刻まれた石塔があり、雨乞いの神として深く信仰されたことが分かる場所である。



⑨ヤツボは急崖な場所が多いので、見学の際は足元に注意をして見学されたい。



2) 大島水場のヤツボ (No51: H18年4月)



湧水は基盤の中津層群と陽原礫層間から湧出しているという。少し急なスロープ状の階段を下ると玉石で囲まれたヤツボが現れる。現在は保

全のために底上げされて流れしか見えないが、積まれた石の下から豊富な水が湧き出し、水路を流れてその先は滝となって流下している。幅2m長さ5mと広く地域の水場として利用されていた様子が良くわかるヤツボである。近くの日々神社の御神水としても利用されたという。



3) 大島古清水上組のヤツボ (No78: H25年4月)

桂川・相模川流域協議会(さがみ地域協議会)がカワラノギク保全活動をしている神沢河原に面した清岩寺近くの急崖な場所にある。登録史跡看板横の急な階段を降りたところに、石組みで湧水を堰き止めたヤツボが見られる。ここは水量が豊富でヤツボの原型をみることが出来る場所である。⑩足場が狭いので落下に注意。



河川敷や丘陵に見られる植物

●長岡 恂/厚木植物会

ミズキ (ミズキ科)

里山のミズキが満開になるとよく目立つ。枝は幹から階段状に出て広げるので、遠くからでも白い水流が滝のように落ちるようだ。枝が水平に広がっているため、「テーブルツリー」とも呼ばれる。近くに寄ると花の香りが強く、アブや甲虫類がたくさん集まっている。

背中のハートマークのカメムシは、ミズキの葉裏に卵を60~70個ほど固めて産み付ける。このカメムシ“エサキモンキツノカメムシ”の母親は、その卵塊に覆いかぶさるように止まり卵を守る習性がある。一般のカメムシ類にはない習性で、孵化して幼虫になっても保護している母親はハートの心そのもの。

ミズキ属で葉が互生するのは本種だけ。他のミズキ属、クマノミズキ、ハナミズキ、ヤマボウシは対生。若枝は冬に赤みを帯びる。冬芽も赤い。この枝に食紅で色づけされた色とりどりの団子(餅花)を飾り、五穀豊穡を祈る小正月の行事が各地にある。養蚕農家ではまゆ玉と呼ばれる。(樹木と方言: 倉田悟 1962)

材は白く柔らかく加工がしやすい。丹沢大山ではおみやげのコマや、箱根の寄せ木細工など郷土の工芸品に多用される。この黒く艶のある実はクマの好物で、山中ではクマ棚を見掛けると言われるがまだ見たことはない。

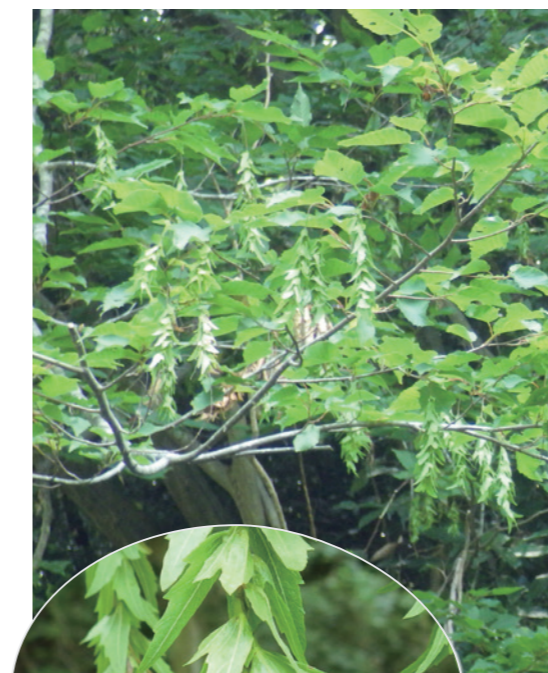


アカシデ (カバノキ科)

新緑の里山で房になって垂れ下がる実が目につく。アカシデだ。「シデ」とは、神社やお祭りの結界でしめ縄や玉串に使う紙(紙垂=しで)で、長く垂れ下がる葉状の果苞の様子をこれに見立てている。別名を「アカソロ」といい、盆栽愛好家はソロと呼ぶ。ソロと呼ばれる木は他にイヌシデ、クマシデ、サワシバがあるが、それらに比べて小ぶりであり、新芽が赤く、幹、葉を始めた木全体も赤みを帯びることから、赤芽シデ、赤目シデなどと呼ばれるようだ。

北海道から九州まで日本各地の山地に分布する落葉樹。里山のコナラ2次林の主要な構成種だ。関東地方では雑木林や河川沿いなどで普通に見られる。材は灰白色で、堅さと美しさがあるが植栽されたものは少なく不揃いで、加工しにくいとされる。櫛、家具類、床柱などに利用される。地域により椎茸栽培の櫓木(ほだぎ)に使われるようだが、クヌギやコナラに比べて利用は少ない。

高さのある木を植えられない庭では、種子から育てた雑木林を感じられる盆栽にして新緑や紅葉を楽しむことができる。種子は風散布型で紅葉の頃、風によってバラケ、翼を広げた小さな実がクルクル回りながら風に乗って遠くへ飛ぶ。この様子も見応えがある。



ムラサキトビケラ

●守屋 博文／神奈川県昆虫談話会

●日本産トビケラとしては最大級

ムラサキトビケラは、大型の種が多いトビケラ科の中で、最も大きな種を含むムラサキトビケラ属の一種です。幼虫は、水の中に堆積した落ち葉などの植物をかみ切って、環状に配列した円筒形の筒巣を造り、その中に入って移動しています。その大きさは終齢幼虫で約4cm、その体を納める巣の大きさはさらに大きくなります。

成虫も翅を広げると7～8cmと大型で、夜間灯火に飛来した時の迫力は、他のトビケラ類とは比べものになりません。成虫の後翅は濃い紫色で、中央やや外側に黄色い帯状の斑紋があり良く目立ちます。ただ、止まっていると翅をたたんで屋根状になるため、その模様を確認することはできません。ムラサキトビケラの標準和名はこの翅の色から付けられています。

●山地溪流に生息

本種の幼虫は、山地溪流の落ち葉がたまった細流や流れを外れた水溜まりなどで見られます。過去の調査では、桂川・相模川水系の中・上流域の各支流で確認されていますが、その数は多くないようです。

堆積した落ち葉を使って筒巣を造っていますので、水面上からのぞき込んでも同系色で見つからず、網などで落ち葉ごとすくい上げ、バットにあげてやっと見つけられます。その大きさから、動き出してくれればすぐに見つけることができま



幼虫と筒巣 (松橋利光氏撮影)

す。刺激を与えると筒巣から脱出することがあり、特に摘まみ上げるとその行動は顕著です。

筒巣から出た幼虫を見ると、腹部に棒状の長い気管鰓が目立ち、頭部背面には黒色条紋がはっきりとみられます。

●水中の小動物を捕食

これだけの大型種ですから、体の成長と維持のためには、よほど多くの小動物を捕食しなければならないと思われます。確かに堆積した落ち葉の中には、多くの水生昆虫や水生生物が潜んでいます。コバントビケラやオオカクツツトビケラなど同じトビケラの仲間をはじめ、ヒメフタオカゲロウの仲間やガガンボやユスリカの仲間といった水生昆虫はもちろん、ミズムシやミミズ類など、落ち葉を食べものとし、また隠れ場所とする生き物は豊富です。ムラサキトビケラが生息する河川は、多くの小動物の生息が必要不可欠であり、生物多様性が保たれていることを物語っています。



成虫



頭部と胸部背面

カマキリとカジカ

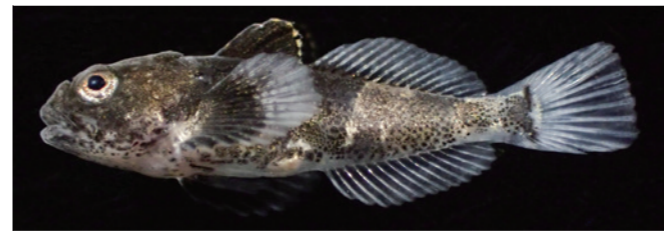
●工藤 孝浩／神奈川県水産技術センター内水面試験場 (文・写真)

ともにカジカ科の在来種で、川底にへばりついて生活する底生魚です。一見するとハゼ類の様にみえますが、腹鰭が吸盤状になっていないことからハゼではないことがわかります。両種は最近まで同じカジカ属とされていましたが、2019年にカマキリは別な属に位置づけられました。

子供の頃から神奈川県を中心に魚採りをしてきた私にとって、カジカは「そこに行けば出会える魚」でした。カジカがいるのは、相模川・酒匂川水系の渓流域や境川の源流です。水中眼鏡をつけて冷たく清らかな流れに顔をつければ、川底の石の上に愛嬌ある顔で鎮座する姿を、ほぼ1年中見ることができました。ところがよく似たカマキリには、50歳を過ぎてなお1度も出会ったことがなく、私にとって憧れの魚となっていました。

転職が訪れたのは2018年、私は長く務めた海の試験場から内水面試験場へと異動しました。日常的に川の調査に出るようになれば、カマキリには時間の問題で出会えるだろうと思われました。しかし、2年が経ち、3年が経っても願いはかないません。そして丸4年が過ぎようとした2022年3月、出会いは突然に訪れました。相模川河口における夜間の集魚灯調査という意外な場で、ついに私はカマキリの幼魚を手にすることができたのです。なぜ幼魚はこんな場所にいたのでしょうか？カマキリとカジカは、姿こそよく似ていますが、カジカが川の上流域で一生を送るのに対して、カマキリは海での生活が必須なのです。

カマキリ



カマキリの幼魚 (2022年3月5日、相模川河口右岸須賀港内産、標準体長18mm)

最も大きな特徴は、エラブタの上部にあるカギ状の棘です(写真は幼魚なので棘は未発達)。これでカマキリのように小魚を捕らえると考えられたようです。またアユカケという別名があり、この棘でアユを引っ掛けるというのがその由来です。

本種は一生のうち川と海とを行き来する通し回遊魚で、未成魚から成魚は川で暮らしますが、海と同等の塩分がある河口や海の岩礁域で産卵します。海に出て産卵する通し回遊魚は、ウナギ類と同じ「降河回遊魚」に区分されます。福井県では、アラレが降る頃に川を流れ下るものを「アラレガコ」と称し、郷土料理で親しまれています。

産卵期は冬で、ふ化した仔稚魚は浮遊生活をしつつ手近な川へと入っていきます。私が捕まえた幼魚は、浮遊期から着底期へ移るステージと思われる、夜間には集魚灯の光に誘われて水面近くに浮上するという興味深い知見が得られました。環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類(EN)、神奈川県レッドデータブックで絶滅危惧ⅠA類に指定される筋金入りの希少種です。本種がここまで減ってしまったのは、河口堰などの河川横断工作物の築造が原因です。本種は流れに抗する遊泳力が弱く、アユやウグイが上れる魚道でも上ることができません。相模川も酒匂川も下流に大きな堰があり、幼魚・未成魚の遡上や成魚の降河が阻まれ、生活圏を縮小させているものと考えられます。



相模川河口の須賀港岸壁における集魚灯調査 (2022年2月18日、平塚市千石河岸)

カジカ



カジカの成魚 (2021年12月10日、相模川本流海老名市スポーツ広場地先産、標準体長120mm)



溪流におけるカジカの生態 (1994年7月21日、酒匂川水系大又沢水深0.3m、体長約70mm)

一生を川の中で過ごす純淡水魚です。卵は大きく、生まれた大きな仔魚は流れに抗する能力をもっており、親が棲む河川上流域から流されることはありません。ところが近年は、大型台風の襲来や頻発するゲリラ豪雨などにより、本種が棲む渓流域の環境が荒廃し、その数を減らしてしまっているようです。

渓流域では、山からの土砂の流入によって川底の石のすき間が埋まり、成魚や未成魚の生活空間が失われるとともに、仔稚魚が下流へと流されやすくなります。生活空間のみならず餌となる水生昆虫なども減り、出水があれば自身が下流へと流されるリスクが高まります。

私は昨年冬、相模川中流域で立派な成魚を採り、何だか暗澹たる気持ちになりました。おそらく出水で流された個体で、流れを遡る能力を考えると渓流域へ戻れる可能性は絶望的と思われました。大型魚ですらこの有り様ですから、幼魚や稚仔魚については想像したくありません。

かつて本種は中山間部における貴重な蛋白源として珍重されてきました。伝統的な食文化の価値が再認識されている現在、中山間部における地域特産物として注目したい魚です。生態系の保全と地域おこしのため、増殖に取り組んでもよいのではと考えています。

桂川・相模川流域の 山梨百名山 その9 名低山 高川山

報告者●中村 光義

▲コロナ禍で久しく交流が途絶えてしまっていた山仲間と、第六波の来る前に、山へ行くことになった。しかし、連絡を取ってみると驚いたことに、この間に私を含めて3名が大病を患っていた。70を超えるとこんなのかと、そして、これまでの登山の日日は大きな幸せに恵まれたものであったと改めて思い知らされた。そんなこんなで、「今度の登山は山歩き、リハビリ登山だね」ということになった。▲さて、行先はどこにしよう。全権委任の私は考えた。3時間未満で登って降りてこられる山。静かで、展望もあり、山の雰囲気の良い山。思いついたのは高川山あった。考えたルートは、南面の古宿からのシラクラ沢コース。体力的な負担を少なくするために、林道の上部まで車で行く。これで禾生駅や田野倉駅から歩いた場合より、行程は1時間近く短縮される。▲車のデポ地からのシラクラ沢コース入り口まで林道を10分余り。ここから山道に入る。沢コースと言っても、沢沿いは5分程、すぐに左に斜上していく。少し滑りやすいが、皆、慣れたものだ。10分程で頂上につながる尾根に乗る。この尾根歩きは明るく、振り返れば富士。急な部分と平坦なところが交互にやって来る。上部に右から合流してくる小尾根が見えるようになると、一段と傾斜はきつくなり手も使うようになる。しかし、短時間でここを登り切れば平坦な地に出る。季節によればここではカタクリが見られる。もう頂上直下と言ってよいのだが、左にロープのついた岩場が待っている。案内にある難所がこれである。傾斜は緩いが下部にスタンスが見つけにくい。しかし、変にこれを嫌って岩場から逃げようとしたらかえって

危険である。岩場を抜けるともう頂上の一角。この日は大きな団体も居てにぎやかであった。



▲南には大きな富士。都留の街の開けた谷越しに裾野からすっきりと整った姿だ。富士が一番均整のとれた姿で眺められるのはこの方角からだときく。いくつになってもお昼のお弁当の時間は楽しいもの。お互いの近況などを伝え合いながらのんびり過ごした。▲下山は大月方面、田野倉・禾生方面、出発はみな一緒に東に向かう。狼煙場跡を見て、すぐ大月方面に向かう尾根ルートから離れて下りにかかる。私たちはちゃっかりお手軽ルートなので、林道にぶつかるまで一途に下るだけ。田野倉に向かう分岐を見送ってから、林道に降り立つ。車まではごく短時間で戻れ、道の駅ついで解散。今のこの時期、体力的にはちょうど良い低山歩きとなった。▲高川登山で多いのはJR初狩駅から北面を女坂か男坂を選択して登り頂上へ。下山は、田野倉か尾根を忠実に最後までたどって大月に出る。また、富士急行の田野倉や禾生から南面を登るコースもある。初狩の登山口を西に向



菅野川、戸沢川合流部付近

かい屏風岩を経て、鍵掛峠、羽根子山と大回りに高川山へ向かうバリエーションルートもある。取り付きは藪っぽく、峠の手前で尾根を外れ左下に降りる所は見送ってしまいがち。気を付けたい。

2022年度（令和4年度）桂川・相模川流域協議会定期総会報告

定期総会開催

報告者●山梨県事務局

日付：2022年6月11日（土）
場所：サンエール相模原（相模原市）

3年ぶりに対面で定期総会が開催されました。

最初に、大阪商業大学の原田禎夫准教授から「未来のために知っておきたい、海とプラスチックの話」と題して講演をしていただきました。

その後、各地域協議会から昨年度の活動状況の報告が行われました。

引き続き行われた議事では、市民部会の市村さんが議長に選出され、総会成立（会員数158人・団体、有効数124（出席者29人・団体、委任状95通））の報告の後、昨年度の事業報告及び決算報告、今年度の事業計画及び予算、役員改選についての審議が行われ、原案どおり承認されました。

講演内容

【川のプラスチックごみへの取組】

海に流れ出すプラスチックごみを減らすため、川のプラスチックごみ対策に取り組むことが大切です。

スマートフォンの位置情報機能を利用したごみマップ・システムでは、どこに、どんなごみが、どのくらいあるのかを地図上に示すことで、身近な河川の様子を知ることが出来ます。

京都府亀岡市では、レジ袋の提供を禁止する「プラスチック製レジ袋の提供禁止に関する条例」が全国ではじめて施行（令和3年1月）されました。亀岡市内を流れる河川で行っているプラスチックごみ調査では、条例施行後にレジ袋が激減しました。

川が海につながっていることを感じながら、身近な河川のプラスチックごみ対策に取り組んでほしいと思います。



【プラスチックごみ対策を進めていくために】

プラスチックごみを無くす魔法はありません。地域、企業、行政のありとあらゆる取組を総動員する必要があります。

何が問題で、何をやる必要があるのかについて社会の中で価値観を共有し、プラスチックごみ対策の仕組みを作っていく必要があります。

【海のプラスチックごみの実態】

日本の海や川でも、ペットボトルや食品の包装などたくさんのプラスチックごみが見つかります。そして、大きなごみだけではなく、細かいマイクロプラスチックもたくさんあります。

グラウンドなどに敷かれた人工芝は靴で擦れたり、紫外線で劣化して小さな破片となります。また、小さなプラスチックカプセルに包まれた肥料は緩効性（ゆっくり長く効く）があり、環境に優しいと推奨されてきましたが、使い終わった後にプラスチック製のカプセルが残ります。

こうしたプラスチックごみは、雨が降ると、町から川へ、そして海へと流れ出します。海へと流れ出したプラスチックごみは、遠く離れた無人島に住む海鳥の命も脅かしています。

太平洋のミッドウェイ島に生息するコアホウドリの幼鳥は、親鳥が餌と間違えてペットボトルのフタや歯ブラシ、ライターなどさまざまなプラスチックごみを与えた結果、大量のプラスチックをお腹にためて命を落としています。

このような海のプラスチックごみのうち、陸から川を通じて流れ出した生活ごみが約8割を占めています。



原田禎夫准教授